ウルティメイトフォースゼロ～THE MATERIAL OF SAGA～

ＡＧＩＴΩ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウルティメイトフォースゼロ～ＴＨＥ　ＭＡＴＥＲＩＡＬ　ＯＦ　ＳＡＧＡ～

【Ｎコード】
Ｎ１３０３Ｚ

【作者名】
ＡＧＩＴΩ

【あらすじ】
ベリアル銀河帝国との戦いから二ヶ月、ウルティメイトフォースゼロはアナザースペースの各惑星に散らばり活動を続けていた。
ウルティメイトフォースゼロのリーダーであるウルトラマンゼロはレギオノイドとダークロプスの目撃報告があった水の惑星アクアスに訪れそこで見たものは……？

Ｅｐｉｓｏｄｅ．０１―惑星アクアスー（前書き）

今回はウルティメイトフォースゼロを書く初めての小説です、ベリアル銀河帝国の後という形で。
そこに大人化したマテリアルズと出会う的な、それぞれの出会いに結構時間を使うようにします。

ＯＰ『キラメク未来』

ＥＤ　挿入歌『すすめ！ウルトラマンゼロ』

登場怪獣
双子怪獣ブラックギラス
双子怪獣レッドギラス
帝国機兵レギオノイドα
帝国猟兵ダークロプス
登場

Ｅｐｉｓｏｄｅ．０１―惑星アクアスー

◆◆◆

ここはアナザースペースと呼ばれる我々が住む宇宙とは別の世界の宇宙。

この宇宙は、我々の宇宙でかつてＭ７８星雲、光の国を壊滅させようとした邪悪なウルトラマン、ウルトラマンベリアルが自分の宇宙である正義に目覚めた若きルトラマンと歴代のウルトラマン達に倒されこのアナザースペースに何らかの拍子に飛ばされてしまいカイザーベリアルとして悪業を働いていた。

アナザースペースでの悪業は元の世界の宇宙にある光の国にまで魔の手が伸びていた、
その尖兵としてダークロプスと呼ばれるベリアルを倒したウルトラマンに似た赤い一つ眼の黒いロボットを送り込み光の国の都市を破壊を開始、
宇宙警備隊の戦士達が交戦を始めた。

乱戦の中、現れたのはベリアルを倒し光の国を救った赤と青、銀に胸に青く輝くクリスタル、カラータイマーが付き肩からプロテクターが掛けられ頭に二つのブーメラン、緑に輝くランプに二つの眼、ダークロプスのモデルとなった若きウルトラマン、ウルトラマンゼロがダークロプスを自分の父、赤い巨人ウルトラセブンと共に撃退

した。

そしてダークロプスが別の宇宙からやってきたと判明しその宇宙に送り込む事になったのがウルトラマンゼロだった。
光の国のすべてのウルトラマンのエネルギーを集中させゼロをアナザースペースに送り込み惑星アヌーという星で助けた青年ランの体を借り、そしてランの弟ナオと共に宇宙を護るという『バラージの盾』を求め旅をすることに。

その旅で惑星エスメラルダの王女エメラナ、エスメラルダ王家に仕える鋼鉄の武人ジャンボット、炎の海賊の戦士グレンファイヤー、鏡の星の勇者ミラーナイトを仲間にしカイザーベリアル率いる銀河帝国に戦いを挑みアナザースペースで仲間にした者達の各惑星の住人達と共にベリアル共々銀河帝国を倒したのだった。

戦いが終わり、ゼロとランは分離、だがベリアルが倒されたからと言ってアナザースペースの悪は滅んでいない、銀河帝国の生き残りもいる。
ゼロはジャンボット、グレンファイヤー、ミラーナイトと共にアナザースペースでの宇宙警備隊、ウルティメイトフォースゼロを結成しこの宇宙の平和を守るために再び戦い始めるのだった。

◆◆◆

Ｅｐｉｓｏｄｅ．０１
―惑星アクアス―

カイザーベリアルとの戦いから二ヶ月は経過しようとしていた。
ゼロは左腕に青いクリスタルが付いた銀色のブレスレット、ウルティメイトブレスレットを嵌めてアナザースペースの惑星を飛び回る毎日を送っていた。

「確かこの惑星だよな……レギオノイドやダークロプスを見掛けられたのは」

ゼロは銀河帝国の残党である帝国機兵レギオノイドと帝国猟兵ダークロプスがこの惑星の近くを航行していた宇宙船の乗組員が見掛けられたと報告があった、
今、彼の目の前に見える青い惑星を訪れていた。

「後、未知のエネルギー反応が捉えられたのもここだ」

他にウルトラマンの力の源、光エネルギーでもないエネルギーの反応を掴みその調査も兼ねてやってきたのだ。

「まずは入らねーと分からねーか……デュアッ！」

両手を大きく広げゼロはその惑星の大気圏に突入した。

そして大気圏内に入るとそこに広がるのは青い水平線とその中に浮かぶ小さな島々だ、この惑星は陸地は少ない代わりに水が多い惑星のようだった、
名前を付けるとしたらアクアスであろう、アナザースペースでもこの惑星はアクアスと呼ばれておりゼロも名前と情報は知っていた。

「なかなかいい景色じゃねーか」

感想を述べながら飛行を続けレギオノイドとダークロプスが潜伏していないか空の上から覗くように調査する。

「見たところ特に何もねーけど……見間違えかぁ？」

愚痴を溢しながら高度を落とし正面が水面に近付いていく、飛行して発生する風で水が弾けていく。

「結構冷てーな」

体を左に傾け飛ぶ方向を変える。
その瞬間に突如爆発音が鳴り響く。

「どこからだ！？」

ゼロは一旦その場で立つように静止し辺りを見渡すと右方向を向くと遠くで黒煙が空へ向かって舞っているのが見えた。

「あそこか！　ジェアッ！」

ゼロは正面を下に向け両手を前に向け広げて飛行し黒煙が舞う方向へ急いで向かった、この惑星の住人にもしもの事があったらと最悪な事態を考えつつ。

◆◆◆

私は消えるはずだった、彼女に負けて。

私と同じ生まれをした他の二人はその元となったオリジナルの魔導師達に敗北し消滅してしまった、私も同じように……それなのに……私に勝ったあなたはなんで泣いているのですか？　私に勝ったのに……

私は消えますが……これからのあなたの道が勝利で飾られますように。

＊

◆◆◆

ゼロが調査に訪れる前の水の惑星アクアス、陸地が少ないこの惑星の孤島に一人の、赤紫を基準にし学生のような服に赤いラインが入り胸に紫のリボンを付け同じ色合いの長いスカートで赤紫の三日月の中に水色の宝石が入った飾りを付けた杖ルシフェリオンを握った茶髪の長い髪の女性が横たわっていた。

彼女の名は星光の殲滅者、又の名をシュテル・ザ・デストラクター、元々は１０歳ぐらいの少女の姿だったはずの彼女だが何かの拍子に２０代ぐらいの女性の姿となりこの惑星に倒れていた、彼女もまた別の宇宙、ゼロやこのアナザースペースとは違う宇宙から来たのだ。

すると彼女は気が付き目を覚ますと起き上がり辺りと自分の姿を見て驚きを隠せなかった。

「なぜ私は存在を……そしてこの姿は……」

自分の姿が大人となっていたのはもちろん、後は消滅したはず、そう思っていた、感じていたのに肉体は成長し未だ存在しているという事実に戸惑いを隠せなかった。

「ここは一体……」

辺りを見渡しても水平線と小さな孤島しか見えずここは自分がいた宇宙にある水と緑の惑星地球ではないことがわかった。

「どうやら別の次元世界に飛ばされてしまったようですね」

彼女の世界では別宇宙ではなく次元世界と呼んでいた、シュテルはただの人間ではない、魔導師と呼ばれる魔法使いで闇の書という魔導師の力の源、魔力を蒐集するシステムの破片からその闇の書を破壊した魔導師の少女をモデルにし生み出されたのだ、だが今の姿はその少女とは違った、まるで十年後の姿を写したような体に、短かった茶髪もロングヘアーとなっていた。

そこに突然水渋きが上がり水中からダークロプスと両手がドリルの帝国機兵レギオノイドαが浮上し姿を現した。

「質量兵器……」

シュテルが知るとある世界の組織では機械等の兵器を全て質量兵器と呼ばれレギオノイドやダークロプスもそれに当て嵌まる。

「やらないといけないみたいですね」

ルシフェリオンを持ち構えるとその杖先に魔力が集結していき桃色の魔力でできた光球、魔力スフィアが生まれ。

「ブラスト……ファイヤァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！！」

＊

そして現在、シュテルはこれからどうしたものかとアクアス中を飛び回っていた、今の自分にはかつてあった闇の書を復活させるという使命ははもうない、それなのにまだ存在しているのは何か理由があるはず、そう考えていた。

「どこを飛んでも水ばっかですね……人の気配すら感じない」

だが魚類とかは豊富に生息しており食料には困らなかった。

次にまたレギオノイド達が現れないか警戒しつつ飛行を続けていると。

「っ！」

何かの気配を感じたのだ、人の気配がなかったこの惑星でそれと同じような、だがその気配と同時に別のエネルギーも感じていた、魔力とは違うエネルギーを。

「接触してみますか……」

何か情報が得られるかもしれない、そう考えこの惑星に訪れた者に接触を測ることにしその方向へ向かおうとしたら。

「また……！」

海中からレギオノイドαとダークロプスが浮上するが何かおかしかった、溺れているようにも見えたからだ。

「海中に何かいる」

そう、この海域には何かいる、次第に二機は海中に引きずり込まれ爆発を起こし、その二機を破壊した巨大な影がシュテルの前に姿を現した。

◆◆◆

そのレギオノイド達の爆発とは知らずにゼロは飛行を続けていた。

「この先だな！」

飛行速度を上げ、どんどん黒煙が昇る地点に接近していく。
ゼロがその先で見たものとは、それは二体の赤と黒の巨大生物と対峙する一人の女性、シュテル・ザ・デストラクターだった。

「女！？　それに……！」

ゼロは赤と黒の二体の巨大生物に見覚えがあった。

「ブラックギラスにレッドギラス！」

背中に大きな角が生え頭部にも長く鋭い角が生えたそれぞれの体色をした双子怪獣ブラックギラスとレッドギラスだ、二体は別名通り双子の怪獣である。

「なぜこの宇宙に俺の宇宙の怪獣が……」

だが今はこの怪獣からシュテルを守るのが先決、後で彼女から話を聞こうと考え頭の角から放つ赤い光線を放ちながら暴れ狂う双子怪獣達に立ち向かった。

「アレは……巨人？」

シュテルの目にゼロが写ると双子怪獣達も気付き目標をシュテルからゼロに変えた。

「ギシャァァァァーッ！！！！」

「ゼアッ！」

ゼロは足を海中に入れまるで立っているかのように浮いてみせると走りだしブラックギラスに強力なパンチを繰り出す。

「グエェェェェェーッ！！！！！？」

ゼロのパンチはブラックギラスの鳩尾にヒットし苦痛の鳴き声を上げながら後退り海中に突き出てていた岩に足を引っ掛け転倒、レッドギラスは次は俺の番だ！　と言うようにドラミングをするとずかずかと走りだしゼロに襲い掛かる。

「デェヤァァァッ！！」

突進してくるレッドギラスの勢いを利用しそのまま投げ飛ばす。

「すごい……」

シュテルはその戦いをただじっと見ていたがブラックギラスが海中から上がってこないのに気付いた。

「まさか！」

気付いた時には遅かった。

「ジェアァァーッ！！！？」

ゼロは海中に引きずり込まれてしまった、この透き通るような綺麗な海でも海底は暗く、気付かれにくい、その地形を利用したブラックギラスに足を掴まれてしまったのだ。

「くそぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉーっ！！！！！！！」

ゼロはそのまま海底に引きずり込まれた、レッドギラスもまた海底に潜りゼロの足を掴んで沈む速度を早めていた。

「離せぇぇぇぇぇぇーっ！！！！！！」

足を動かそうと力を入れるが二大怪獣の前ではまったく動かず海底奥深くに引きずり込まれてしまった。

双子怪獣は足を放す、ゼロは海底の底の地に足を付く、そこは光が射し込まないため暗く視界が悪かった。

（綺麗な惑星なのに底は結構暗いんだな）

黄色く輝く眼が暗闇を照らすが全体は見渡せず視界が悪いのは変わりなかった。

（こういう時ミラーナイトがいればな……）

ミラーナイトが外から鏡を作り海底まで光を反射させ射してくれるだろうと思うが今いない者の事を考えても仕方ない、神経を研ぎ澄ましブラックギラスとレッドギラスがどこから仕掛けるか注意をするのだが。

「グワァッ！？」

背後からブラックギラスの背中の角による攻撃を食らい前のめりに躓く。

双子怪獣は回りを泳いでいるようで頭の角はレーダーとなってい

るためそれを頼りに泳いでいた、
次はレッドギラスの攻撃を腹部に食らい後退りまたブラックギラスの攻撃を背中に食らい前へ倒れた。

（くそぉ……）

悔しそうに拳を地表に叩き付け起き上がるが立たない、考え事をしていた、この状況をどう打開するか、このままでは双子怪獣の必殺技、攻守優れた回転攻撃ギラススピンでトドメを刺される可能性があるからだ。

（……そうか、目で見なければいいんだ）

考える末ゼロは気付いた、目で見ているから目の前の事しか見えない、ならば感じ取ればいい、ゼロの光り輝く眼は消え完全に辺りは暗くなった。

「……」

ゼロは集中していた、師匠であるウルトラマンレオから習った心眼、心の目で双子怪獣を見付けようとしていた。

外ではシュテルが空を飛び海面を見ていた。

「あの巨人は一体……」

ゼロの事が気になっていたようだ、今自分が曝されている状況を打開するためょ最大の手掛かりでもあるからだ、
もし上がって来なかったら住人がいないこの惑星で一人きりになってしまう、なぜか一人きりになるのが恐ろしいと感じていたため緊張から出た汗を流す。

「渦潮？」

その刹那、海面に渦潮ができていた。

（流れが変わった）

ブラックギラスとレッドギラスが両手を組み合って高速回転するギラススピンを炸裂して海流が変わったのだ。

（見えたぜ！）

ゼロの眼に再び光が戻り左足を上げ前に伸ばし右足を軸にし自分も高速回転を始めた。

「デェヤァァァァァァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！！！」

ギラススピンにより強力な渦が発生したがゼロもそれに負けない渦が発生させる。
渦と渦はぶつかり合い激突する。

『グエェェェェェーッ！！！！！！』

双子怪獣は大きな声を上げて回転速度を速めるがゼロも同じだった。

するとゼロは飛び上がり左足を下げギラススピンの中に入り込み浮上を始めた。

「海底で一体何が……」

渦潮が大きくなるのを見つめているとそこからブラックギラスとレッドギラスが水渋きを上げて飛び出し落下して海面に叩きつけられた。

「ジェアッ！」

勢い良くゼロは海中から飛び出してきて空を舞う。

「ウルトラマン……」

シュテルは名前も知らないのになぜかその名を自分より高く空を舞うゼロを見て呟いているとブラックギラスは頭の角から赤い光線を放ち攻撃をする。

「……」

シュテルはルシフェリオンをブラックギラスの角に向け魔力スフ

ィアを杖先に集結させていく。

「ブラストォォ………ファイヤァァァァァァーッ！！！！！！

！」

その魔力スフィアから桃色に輝く砲撃が放たれブラックギラスの角に直撃し圧し折る。

「もう一発！」

もう一発放ち今度はレッドギラスの角を破壊した。

双子怪獣は角を破壊された痛みに悶え苦しんでいるとゼロは頭の二つのブーメラン、ゼロスラッガーを持ち急降下する。

「ゼェイヤァァァァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！！！！」

海面に足を付き水渋きを上げながら滑るように走り右手を真っ直ぐ伸ばしその手に握られたゼロスラッガーでレッドギラスの首を一閃、

次に回転して左手のゼロスラッガーでブラックギラスの首を一閃し双子怪獣の背後で右腕を曲げ左腕を伸ばした状態で静止する、

その間、先にレッドギラスの首が崩れ落ち次にブラックギラスの首が崩れ落ち胴体が倒れると頭と共に海底深くに沈んでいった。

「呆気なかったぜ」

ゼロスラッガーを頭に戻し空を浮遊するシュテルを見る。

「人間………」

シュテルもゼロを見ていた、ゼロはこのままでは話しづらいと考え金色の光となり近くの孤島の大地に付くとかつて一体化したランの姿ではなく左腕にウルティメイトブレスレットが嵌められ白っぽい少し汚れたような服を着た地球人の黒髪の青年の姿となる。

シュテルもその孤島に足を付き向かい合い「あなたは？」と名前を尋ねる。

「俺の名前はウルトラマンゼロ、この姿の名前は……モロボシ・シンだ」

To the Next Episode・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ．０１―惑星アクアスー（後書き）

マテリアルズが２０代なのはリリマテで幼女なので、あっちは次第に成長していきますから、因みにＳｔｒｉｋｅｒｓ編を考えていますし。
シンはプレミアステージの人間態を東京公演で演じたマモで、宮野さんで。

次回予告

シン
「闇の書？」

シュテル
「私はその本のバグみたいなものですよ」

シュテル
「あなたに何がわかるんですか？　生きるための意味であった目標を失った私達の事を……」

シン
「分からねーよ！　けどな、目標なんて気付けば次から次へと見つかっているんだ！」

ラゴラスエヴォ
「ガゴォォォォォォッ！！！！！！！！」

ゼロ
「一緒にやろうぜ、シュテル！」

シュテル
「はい！」

次回『Ｅｐｉｓｏｄｅ．０２―ゼロと星光―』
お楽しみに

Ｅｐｉｓｏｄｅ．０２―ゼロと星光―（前書き）

少しエロネタに走りました、やりたかったんです！
Ｒ－１５やった方がいいかな？とか思っていたりしますがそれで読み始めた人が読めなくなったらと思うと……

登場怪獣
進化怪獣ラゴラスエヴォ
登場

Ｅｐｉｓｏｄｅ．０２―ゼロと星光―

◆◆◆

Ｅｐｉｓｏｄｅ．０２
―ゼロと星光―

「俺の名前はウルトラマンゼロ、この姿の名前は……モロボシ・シンだ」

名前を紹介するウルトラマンゼロことモロボシ・シン。

「私は星光の殲滅者、又の名はシュテル・ザ・デストラクター、シュテルとでも呼んでください」

互いに自己紹介が終わると何者なのかを聞き始めた。

「俺はこの宇宙とは別の宇宙からやってきたウルトラマンだ」

だがシュテルにはウルトラマンという名に聞き覚えがなかった、先ほどのは何となく呟いただけでどういうものなのかは知らない、

そのためシンはウルトラマンについて話した。

「このアナザースペースって宇宙とは別の宇宙にあるＭ７８星雲、光の国を中心に設立された宇宙警備隊って宇宙の平和を守る組織に所属している光の国の一族でその種類は様々、赤かったり青かったりってな」

ゼロは両方に当て嵌まる体をしていたためそれを聞いてみたがシンも判らないようだ、なぜ自分は青と赤の体なのか。

「君は？」

「私は闇の書のプログラムの破片からできた魔導師です」

シンは「闇の書？　魔導師？」と聞き覚えがない単語が出てきたため首を傾げる。

「魔導師とは魔法を使う者を一括りにした呼び方で先ほどのように砲撃魔法や様々な種類の魔法を使い戦います」

シンは腕を組んで近くの岩に座り話を聞く。

「闇の書とは魔導師の力の源、魔力を蒐集するための道具です、目的は研究のためなのですが……何者かがプログラムを変えてしまったため滅びの道具となり各次元世界を漂っていたのですが」

今度は「次元世界」に疑問符を浮かべたため彼が言う別の宇宙という意味と説明した、シュテルの方が頭が良いようだ。

「ある世界で闇の書は破壊されその破片から私や他に二人がその破壊した魔導師の少女達をモデルにし生まれ闇の書の復活させようと

したのですがやはり彼女達に阻止され、
他の二人と一緒に消滅したはずなのですがこうして成長した姿でこの世界に」

後の事は判らない、こうして互いの正体やどういう身分なのかを教え合った。

「簡単に言えば私はプログラムのバグみたいなものですよ」

その言葉にシンは引っ掛かりを感じたがあまり気にせずいた。

「まぁだけど良かったじゃねーか、消滅したと思ったらこうして存在して生きてるんだからさ」

その何気ない誰もがそう感じるだろうという言葉を掛けるのだが。

「良かった？　何が良かったのですか？」

だが彼女の反応は違っていた、シンを見る目に怒りが露になっていた。

「あなたに何がわかるんですか？　生きるための意味であった目標を失った私達の事を……」

考えは人それぞれ、それを考えなかったシンは彼女の心を知らないうちに傷付けていた。

「それは……」

何も言い返せなかった、もし自分も生きるための目標が無くなっ

たら彼女のように怒るだろうと。

「悪かったな……」

「別にいいです」

険悪な雰囲気になってしまいシンは苦虫を噛んだような顔となり自分の何気ない発言に後悔していた。

するとシュテルは靴に桃色に光る羽根を展開させ浮遊する。

「どこに行くんだよ？」

「あなたには関係ありません、では」

冷たく言い捨てるとシュテルはその場から飛んでいってしまった。

「待てよ！」

ウルティメイトブレスレットのクリスタルからメガネ型のレンズがオレンジのアイテム、ウルトラゼロアイを出しそれを持ち目に着眼した。

「デリカシーがない方でした」

ぶつぶつと言いながら飛行している後ろに気配が、振り向くとそこにはシンが変身もとい元の姿に戻った等身大のゼロが追い掛けてきた。

「どこに行くんだよ？」
「言う必要ありません」

だがこの惑星は水と少しの陸地しかない、元の宇宙に帰れたり大気圏外を行くこともできないためただ闇雲に飛んでいるのだと気付いていた。
ましてや怪獣が生息しているこの海で一人は危険、放ってはおけず追い掛けてきたのだ。
ゼロはシュテルの隣に並び飛行速度を合わせる。

「着いてこないでください」
「俺の行く方向もこっちなんだ、別に着いてきている訳じゃねーよ」

性格上素直じゃないゼロは遠回しにそう言い飛行を続ける、シュテルが右に行けばゼロも右に、左に行けば左と後を追う、シュテルは「やっぱり着いてくる」と呟くがとやかく言う気にはなれなかった。

「……」
「……」

二人は黙り込み黙々と飛行していたがその沈黙は二つの腹の虫により破られた。

「腹減ったな……」
「はい」
「適当な島に降りて魚でも獲るか？」
「賛成です」

意見が一致して適当な小島に降りゼロはシンの姿に戻る。

「お前はどうやって魚を捕ってたんだ？」
「潜って手掴みです」
外見に似合わずワイルドなと思いつつ流れ着いている適当な木の枝を拾う、まったく緑がないというわけでもないようだ。
「これを槍代わりにして俺が捕まえてくるから火を起こしてくれねーか？」
「かしこまりました」
ゼロの姿で潜ればと思ったがあの力はこんな事に使うべきではないと気付いていたため言わずこの島に元から落ちている木の枝や石を使ったりして火を起こすことに専念した。

数分後、シンは海中から上がり木の槍には何匹かの魚が突き刺さっていた、シュテルも火起こしは成功していたためすぐに焼ける状態だった。
「結構やるじゃん」
「あなたこそ」
木の枝に魚を口から刺してたき火に近付け焼いていく、気付けばこの惑星は夜を迎えていた、夜空に星が輝いておりたき火で辺りを照らしていた。

「……なぁ」

火を見つめながらシンは話し掛けた。

「どうかなさいましたか？」

「数日間この惑星に一人でいたんだよな？　怖く……なかったか？」

その質問にどう答えればいいか分からないシュテル、なぜ一人きりになるのを恐がっていたが未だに分からず困っていた。

「……分かりません、ですが一人きりになるのを怖がっていたのは確かです、なぜなのかはわかりませんが」

「怖がっているじゃねーか」

その答えに揚げ足を取ると「別にいいじゃないでしか」と返ってきた。

「さっきは本当にごめんな、何も考えずに知ったような事言っちまって」

「謝るのは私もです、私も頭に血が昇っていたました」

自分だけ悪いとは言わずちゃんと「も」を付ける辺りしっかりしている、魚がいい焼き加減となりその魚に噛り付き食す。

「こんな風に何か食べる前に消えたので少し感覚が新鮮です」

「そうか？」

「はい」

二人は魚を食べていき食べきれなかったのは朝食にしようと考え

葉っぱに包んだ。

「これからどうするんだ？」

その問い掛けはもっともである、この惑星は住人がいない、開拓しようとも陸地はない、最低でも食料の魚類を捕獲するためにしか訪れる機会はない。

「そうですね……やはり目標がないですからね」

先ほどの事をまだ根に持っているのか、「目標」を強調して言ってくる。

「分からねーよ、けどな、目標なんて気付けば次から次へと見つかっているんだよ」

「あなたも？」

頷いて返すと大きな欠伸をし目に涙を浮かべる。

「なんか眠くなってきた……」

「夜も遅いですから、寝ましょうか？」

「そうだな」

星空を眺めるように正面を上に向くように横になるが少し風は冷たく。

「使えよ」

シンは自分が羽織っていた服をシュテルに渡して横を向いた。

「……ありがとうございます」

少し微笑むとありがたくその服を掛け布団代わりに使い上に掛け瞼を閉じた。

（寒ぃー！）

寒さには弱いシンだったが強がりなためもう返して等は言えないと思い無理やり寝に付くのだった。

◆◆◆

そして朝日が昇ると同時に寝付きが悪かったシンはすぐに起床し起き上がり眠い目を腕で擦る。

「そういやアイツは……」

シュテルはまだ寝ているのか、隣を向き状況を確認すると。

「なっ！？」

驚愕した、自分が渡した服は確かに掛け布団として体に掛けてい

る、だが昨日着ていた紫の服を着ていない、綺麗な素肌が露になっていた。
魔導師の服バリアジャケットは攻撃からある程度は身を守るのだが服で被っていない所も常に魔力の薄いバリアで被っている、従い寝る時もずっと着ていたら魔力を使い果たして戦えなくなる、そのためシュテルはバリアジャケットを解除したのだろうが私服とか着ていないままの状態、素肌でバリアジャケットを着ているのと同じようなもののため今の状況に至っているのだろう。

「ん……あ、おはようございます」

そこで目覚めてしまいシンはすぐさま後ろを向き「おはよう！」と声が裏返りながら返す。

「どうかなさいましたか？」

気付いていないのかと思うが自分からバリアジャケットを解除したため気付いてはいるだろう。

「ふふふ、服！　服！」

かなり動揺しながら服を指摘。

「あ、寒かったですか？」

起き上がる、起き上がるなよと思いつつ目をギュッと瞑る、文章で１８禁に引っ掛からないように丸く収めるとしたら子供が産まれた直後の姿としか表しようがない、それ以上は１８禁送りになる。

「服ですか？　はいどうぞ」

天然なのかシュテルはシンに服を返した、なぜ慌てているのか目覚めた直後の脳では理解できず。
とりあえず後ろを向いたまま受け取りその服を羽織る、温もりを感じていた、先ほどまで素肌のまま着ていた服を着ていると実感しながら。

（温けぇ～……じゃねー！）

なぜ温もりを呑気に感じているんだと心中で自分で自分を突っ込みつつ落ち着きを取り戻そうと深呼吸を一度する。

「なぜ後ろを向くのですか？」

やはり気付いていない、シンは自分の口からそれを指摘するのは何かを失うと思い言わなかった。

「あ、いや、そのね……」
「ん？」

様子が変だなと思ったのかシュテルは近付いてきた、近付くな！
嬉しいけど近付くな！　と心の中で叫ぶがその願いという名の叫びは届かず肩を手で叩かれ恐る恐るゆっくり頭だけ振り向くと。

「様子が変ですよ？　昨日の魚に当たりましたか？」

後ろにはちゃんとバリアジャケットに身を包んだシュテルがいた。

「あ、なんでもありません……」

緊張の糸が解けたため力が抜け後ろへ倒れ正座しているシュテルを下から見上げる。

「顔色が悪いですよ？」

あなたの所為だと言っても分からないだろうなと思い苦笑しつつ返す、当分この惑星にいる間は毎朝こんな事になるのかなと思いつつ溜め息を吐く。
やはり眠りから覚めた直後だからか大きな欠伸をし腕を伸ばすと。

『ん？』

同時に声を上げた、シュテルはどこか触られている感覚がし下を向く、シンは何か触っている感覚がし手で触っているものを揉んでみる。

「あ……結構大きくて柔らかいですね」

もう笑うしかなかった、上から見上げるシュテルの顔は無表情だった、無表情で立ち上がりルシフェリオンを出し杖先を下に向け魔力スフィアを集結させていく。

「ブラストォォォォォ……！」
「ちょっと待t！」
「ファイヤァァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！！！！」

シンは断末魔を上げることなく桃色の閃光に包まれた、服の事は気付かなかったのに理不尽なと感じながら。

「ヒデェ……」

砲撃を受けたシンは煤だらけになっており涙目になっていた。

「当然の報いです、女性の体を触るというのはこういう事です」

仁王立ちしながら言うが。

「自分はどうなんだよ……ほとんど際どい格好で寝てたくせに……」

「何か言いましたか？」

「いえ何も」

これ以上掘り返したらさすがに自分の身がもっと危険に曝される、そう感じこの話は終わらせた。

「それでこれからどーする？」

朝食も昨夜の魚に軽く火に曝してから食べ終えた、シンはこの惑星になぜ怪獣がいるか調べなければならない。

「……着いていって……よろしいですか？」

その問いにシンは答えが決まっていた。

「もちろん、いいぜ」

行く宛ても目的もない状況、彼女を放っておくことができないシンは了承した。

「さて、飯も食い終わったからな、行こうぜ」

ウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取り出すが。

「海が……！」

目の前で海面が泡を吹いていた、シンは海に手を入れるがすぐに抜いた。

「熱い……沸騰しているのか」

「海底火山が噴火をしたのでは？」

様々な推測をするが、海を沸騰させているものが海中から姿を現した。

「ガゴォォォォォォッ！！！！！！！！！！」

黒い体に側面はまるで岩のような皮膚にマグマが光るように所々が赤く光っており胸に赤く光る丸い角が付いたコアが浮き出ており正面はダークブルー、黒の模様が入り赤く、肩に二対の角、背中には上から下に掛け長さが小さくなっていく背鰭に左右にと後頭部に生えた大きな角、口に生えた長く鋭い牙の怪獣が浮上してきた。

「ラゴラスエヴォ！」

進化怪獣ラゴラスエヴォ、この怪獣は冷凍怪獣ラゴラスが溶岩怪獣グランゴンの、今自分の胸に浮きでている背中にあったコアを捕

食しその能力を取り込んで進化した姿だ。

「朝のラジオ体操がてら相手してやんか」

ウルトラゼロアイを持った右腕を伸ばし。

「デュワッ！」

それを着眼するとレンズから火花が回転しながら散りスパークする。

回りに赤と青の光の線とゼロスラッガーが乱舞していき頭から足に掛けて元の姿に戻っていく。

「ディアッ！」

両腕を左右に広げ拳が上に向くように曲げるとどんどん巨大化していきラゴラスエヴォと同じぐらいの身長となった。

シンは元の姿であるウルトラマンゼロに変身を遂げたのだ。

「ウルトラマン……ゼロ」

シュテルは静かに呟くとゼロは走りだしラゴラスエヴォに掴み掛かる。

「ゼェイ！」

チョップを胸部に食らわすがダメージは効いておらずラゴラスエヴォに殴り飛ばされ海面に倒れ水渋きを上げる。

「強い……！」

ラゴラスエヴォの強さに驚愕していると次の攻撃を仕掛けるためゼロに接近するラゴラスエヴォ。

「ぐっ……うおっ！？」

立ち上がろうとすると頭を鷲掴みにされ無理やり立たされるとラゴラスエヴォはゼロの鳩尾に拳を何回も打ち込んでいくと頭から手を放し右腕を掴み軽々と持ち上げ投げ飛ばした。

「グアァッ！？」

倒れたゼロの腹に大きな足で踏み付け海底に沈めようとする。
このままではやられると察するがこの状況をどう打開すればいいかが思い付かなかった。

（どうすれば……！）

だがその考える暇さえ与えてくれないラゴラスエヴォは踏み付けをやめない。

「グゴォォォォォッ！！！！！！」

何もできないゼロを嘲笑うように雄叫びを上げてにやけた表情で何度も踏み付けていく。
胸のカラータイマーが青から赤に変わり点滅を始めてしまう、これはエネルギーの残りが少ないという危険信号だ、
このままで危ない、そう感じたその時、ラゴラスエヴォを桃色の閃光が吹き飛ばした。
ゼロは起き上がると隣にシュテルがルシフェリオンを持ち浮遊し

ていた。

「あれだけ言っておきながら苦戦するなんてだらしないですね」

ゼロに向かって毒を吐くシュテル。

「うるせぇ！　放っておけよ！」

性格上それには逆ギレ、立ち上がるとシュテルも合わせて高い位置を飛ぶ。

「フッ……まぁいい」

一度鼻で笑うと鼻の下を右手の親指で掻く。

「一緒にやろうぜ、シュテル！」

「はい、シン……ウルトラマンゼロ！」

初めて互いの名を呼び合い起き上がるラゴラスエヴォを睨む、ゼロは左手の平を広げ左腕を伸ばし右腕を曲げて手を拳にするまるで拳法家のような構えを取る。

「デェヤァァァァッ！」

まず最初にゼロが走りだしラゴラスエヴォに突貫、また性懲りもなくと迎え撃とうと口内に青い光を溜めてからそれを冷凍光線にして打ち出した。

「ゼアッ！」

ゼロスラッガーを投げ付け光線を切り払いさせると飛び上がりそのゼロスラッガーを足場にして高くジャンプし頭に戻ってくると右足に炎が纏い強烈なキック、ウルトラゼロキックを炸裂し急降下していき。

「グゴォォォォッ！！！？」

ラゴラスエヴォの鼻先に命中し大きく吹き飛ばした。

「次は私が行きます！」

シュテルの足下に桃色の魔方陣が現れると回りに無数の魔力スフィアが形成されていき。

「パイロ……シューター！」

その魔力スフィアを打ち出し立ち上がったラゴラスエヴォの回りを飛び交い身動きを取れなくする。

「ガガッ！？　ギャオッ！？」

下手に動くと飛び交う魔力スフィアに激突し爆発が起こり吹き飛ぶと更にまた魔力スフィアに激突と繰り返していくとラゴラスエヴォはよろめく。

「散々いたぶってくれた礼、ここでしてやるぜ！」

左右の角を掴み勢いよく引き顎を膝に当てさせるとラゴラスエヴォは後退り更に上段回し蹴りを連続で何発も顔面の側面に浴びせていく。

「おっ」

ゼロはしゃがむとラゴラスエヴォはそのまま踏み潰してやろうと足を大きく上げたのだが。

「ブラスト……ファイヤァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！！」

桃色の砲撃が胸に直撃と同時にゼロは腹にパンチを炸裂し大きくラゴラスエヴォを吹き飛ばす。

「ガゴォォォォォォ……！」

「ゼッ！」

ゼロスラッガーを投げラゴラスエヴォの左右の角を切り落とすと戻ってきてから左腕を広げ水平に伸ばし。

「デヤッ！！」

腕をL字に組み薄いオレンジ色に輝く光線、ワイドゼロショットを放つとラゴラスエヴォの口内が青く、胸のコアは赤く光りそこからそれぞれ光線が放たれた、
コアからは熱光線が放たれ二つの光線は混じり合い超温差光線として放たれワイドゼロショットを一瞬にして蒸発させてしまった。

「ワイドゼロショットが……！」

まだ切り札があるんだと言わんばかりなラゴラスエヴォは嘲笑うような鳴き声を上げる。

「ゼロ、力を合わせましょう」
「そうだな！」
ゼロスラッガーが乱舞し両手で掴むとカラータイマーの左右に装着する。
シュテルの足下と目の前に巨大な魔方陣ができ、目の前の魔方陣に魔力スフィアが形成されていく、ブラストファイヤーより巨大な。
「集え明星……すべてを焼き尽くす焔となれ……！」
ルシフェリオンは上に向くように掲げている、杖先は変化し桃色に輝く羽根が展開されている。
ゼロスラッガーは青く輝いていき光エネルギーを集結させていく。
ラゴラスエヴォはもう一度超温差光線を放とうと口とコアにエネルギーを集結させる。
「ルシフェリオ～ン！」
ルシフェリオンの杖先を目の前の魔方陣に向けるとゼロは両手を広げる。
「ブレイカァァァァァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！！！」
「ゼェヤァァァァァァァァァァァァァーッ！！！！！！！！！！！！！」
ブラストファイヤーより巨大な砲撃ルシフェリオンブレイカーと胸に装着したゼロスラッガーから放たれる青白く輝く必殺光線、ゼロツインシュートが同時に発射された。

ラゴラスエヴォも超温差光線を放ったがそれすら蒸発させる威力に増した二人の同時攻撃には為す術なく光線が直撃した。

「ガァァァァ……ゴォォォォォォォォ……！」

光線が止まるとラゴラスエヴォは動きを止め粉々に大爆発を起こし倒された。

「フッ」

「フフッ」

ラゴラスエヴォを倒し互いの顔を見合せ鼻で笑うとゼロの体に光りが纏い等身大となると近くの小島に降り立ちシンの姿に戻りシュテルもその島に降りる。

「倒しましたね」

「ああ……たく俺一人でも十分だったのによ」

「どこがですか？　自分から一緒にやろうと言いだしたのに」

互いに皮肉を言い合うがそれをおかしいと思ったのかクスッと笑い。

「だけど大した奴だよ、お前は」

「あなたこそ」

シンはウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取り出す。

「おいシュテル」

「はい、何でしょうか？」

「俺の……いや、俺達の仲間になれねーか？」
「あなたの……ですか？」
海の近くまで歩いて背を向け振り向く。
「ああ、俺達、宇宙の平和を悪から守るウルティメイトフォースゼロのな！」
「……悪くないかもしれませんね」
「じゃあ決まりだな、手始めにこの惑星になんで怪獣がいるのかを調査だ！」
「かし……いえ、了解」
ウルトラゼロアイを着眼して等身大のゼロに変身するとシュテルと共に舞い上がりこの惑星の空を駆け巡るのだった。

To the Next Episode...

Ｅｐｉｓｏｄｅ．０２―ゼロと星光―（後書き）

次回はミラーナイト編に移行しまする。
ゼロとシュテルは力押しという組み合わせですかね？
近いうちウルティメイトゼロが出るかも……結構それに心が！

次回予告

ミラーナイト
「この怪獣達は一体……」

レヴィ
「光翼斬！」

ミラーナイト
「大丈夫ですか？」

レヴィ
「う～ん～……わからない！」

ミラーナイト
「あの甲冑は一体！？」

レヴィ
「ミラーナイト！」

次回『Ｅｐｉｓｏｄｅ．０３―岩の惑星での激闘―』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1303z/

ウルティメイトフォースゼロ～THE MATERIAL OF SAGA～

2011年12月5日20時19分発行